

Extreme PRESS

[エクストリームプレス] by AJPS

Vol. 12

2014 SUMMER

アスリートの躍動を記録するスポーツ・グラフィックス

[JAPAN SWIM 2014]
第90回 日本選手権水泳競技大会

「青の領域」



FREE

ご自由に
お持ちください

アスリートの躍動を記録するスポーツ・グラフィックス

Extreme PRESS

【エクストリームプレス】 by AJPS

Vol.12
2014 SUMMER

「日本スポーツプレス協会」
(Association Japonaise de la Presse Sportive)
1976年に発足。国内外の第一線で活躍するスポーツ
フォトグラファー、ジャーナリスト170名以上が所属。



[Cover Photo]

末石直義 写真 Photo by Naoyoshi Sueishi

鍛えあげられたトップ選手の競泳バタフライの力強さと肉体と姿勢の美しさに僕らは魅了させられる。彼らの動作から迸る水飛沫は彼らの汗を巻込み、ゴーグルで阻まれる強い眼光の目指すゴールへの軌跡となるのだ。

2014.4.12 女子 200M バタフライ
Nikon D3s AF-S NIKKOR 400mm F2.8G
ED VR 1/1000 F2.8 ISO2000
ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ 32GB

www.ajps.jp

Publishing / AJPS (Association Japonaise de la Presse Sportive)
Publisher / Akito Mizutani
Producer / Yoshiyuki Osumi
Project Manager / Rimako Takeuchi · Takahito Mizutani
Editor in Chief / Noriko Hayakusa
Editor / Tsutomu Takasu · Atsushi Nakayama · Hideyuki Imai
Design / Atelier[a:]r Rika Ito
Printing / Hankyu Co.,Ltd.

特別協力：公益財団法人 日本水泳連盟
<http://www.swim.or.jp/>

CONTENTS

「青の領域」

巻頭エッセイ Vol.12

「魚になるまで泳げ」

岩本勝暁 文 Text by Katsuaki Iwamoto

Moments

末石直義 写真 Photo by Naoyoshi Sueishi

木下健二 写真 Photo by Kenji Kinoshita

近藤 篤 写真 Photo by Atsushi Kondo

高須 力 写真 Photo by Tsutomu Takasu

Close Up

萩野公介 Kosuke Hagino

〔東洋大学／ロンドン五輪・男子 400M 個人メドレー銅メダリスト〕

「リオでは、4年間で成長した姿を見せたいと思います」

折山淑美 文 Text by Toshimi Oriyama

末石直義 写真 Photo by Naoyoshi Sueishi

Impression

「何も考えずに、素の状態でシャッターを押し続ける」

小林 洋 写真 Photo by Yow Kobayashi

竹澤 哲 文 Text by Satoshi Takezawa

末石直義 写真 Photo by Naoyoshi Sueishi

最も水抵抗を受ける水面に出る直前、水面はうねり身体もゆがんで見え、ちょっとしたブラックホールをホールを作りだす。動画ではわかりにくく、写真の強さの一つであろう。水面に出る瞬間は選手は水面を見ているのか、その向こうの景色のどちらを見ているのだろう…。

2014.4.12 女子 50M 背泳ぎ
Nikon D3s AF-S NIKKOR 400mm F2.8G ED VR
テレコンバーター TC-14EII 1/1000 F4 ISO2000 ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 32GB

「魚になるまで泳げ」 岩本勝暁

偉大なる故人は言った。かつて33回も世界記録を塗り替えた、古橋廣之進である。

戦後の混乱が続く1948年、ロンドンでオリンピックが開催された。出場が許されなかった敗戦国の日本は、同じ日程で日本選手権を行った。8月6日の神宮プール。古橋は1500m自由形で18分37秒0の世界新記録をマークした。オリンピックで優勝したマクレーン(アメリカ)のタイムを40秒以上も上回る大記録だった。

食糧難の時代に1日2万メートルも泳いだ。多い日は3万メートルにも及んだ。地球を1周半、かれこれ6万キロも泳いだとと言われている。アメリカの新聞記者は賞賛と敬意を込めて

『フジヤマのトビウオ』と呼んだ。

文字どおり戦後復興のヒーローだった。

その古橋がローマで客死して5年が過ぎようとしている。

スポーツは科学的になった。トレーニングは「量」よりも「質」が求められるようになった。トップスイマーのストリームラインは美しく、極限まで水の抵抗を少なくする泳ぎへと変わりつつある。

だが古橋が残した「水泳道」の精神は、今も脈々と受け継がれている。

忘れてはいけないものが、そこにある。



Moments

「青の領域」

木下健二=写真 Photo by Kenji Kinoshita

如何に早く泳ぐか。単純な競技に見えるが、その時の水の抵抗は凄まじい。
これでもか、というくらい選手の身体に纏わりついてくる。
しかし、その無限の動きをする水の美しさには、目を奪われてしまうのだ。

2014.4.10 男子100M平泳ぎ

Canon EOS-1D X EF400mm F2.8L IS II USM

エクステンダーEF1.4×III 1/1000 F4 ISO4000 ホワイトバランスオート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 16GB





近藤 篤=写真 Photo by Atsushi Kondo
初めて水泳を撮ると、まずなによりもスイマーの肉体を包む水の不思議な形態に心を奪われる。ある水は飛沫となって宙に舞い上がり、ある水は流れとなって肉体の上を滑ってゆく。連写した何枚もの写真的なから、一番不思議で美しいと思う水の形態を選択する。それが水泳の撮影における一番の醍醐味かもしれない。

2014.4.11 男子200M 自由形
Nikon D3s AF-S NIKKOR 400mm f/2.8G ED VR 1/500
F2.8 ISO800 ホワイトバランス オート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 32GB



高須 力=写真 Photo by Tsutomu Takasu
ビ、ビ、ビ、ビッ…ビー。短くリズミカルな電子音がスイマーをスタート台に誘う。集中力が高まる。「ヨーイ」のアナウンスのあとに長い電子音が鳴り響く。その瞬間、彼らは一斉に飛び込み、僕達の視界から消える。スートと動く人影。僕は彼らが再び姿を表す瞬間に集中した。
2014.4.11 女子50M平泳ぎ
Canon EOS-1D X EF400mm F2.8L IS II USM
1/1000 F2.8 ISO1600 ホワイトバランス マニュアル
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 32GB

近藤 篤=写真 Photo by Atsushi Kondo

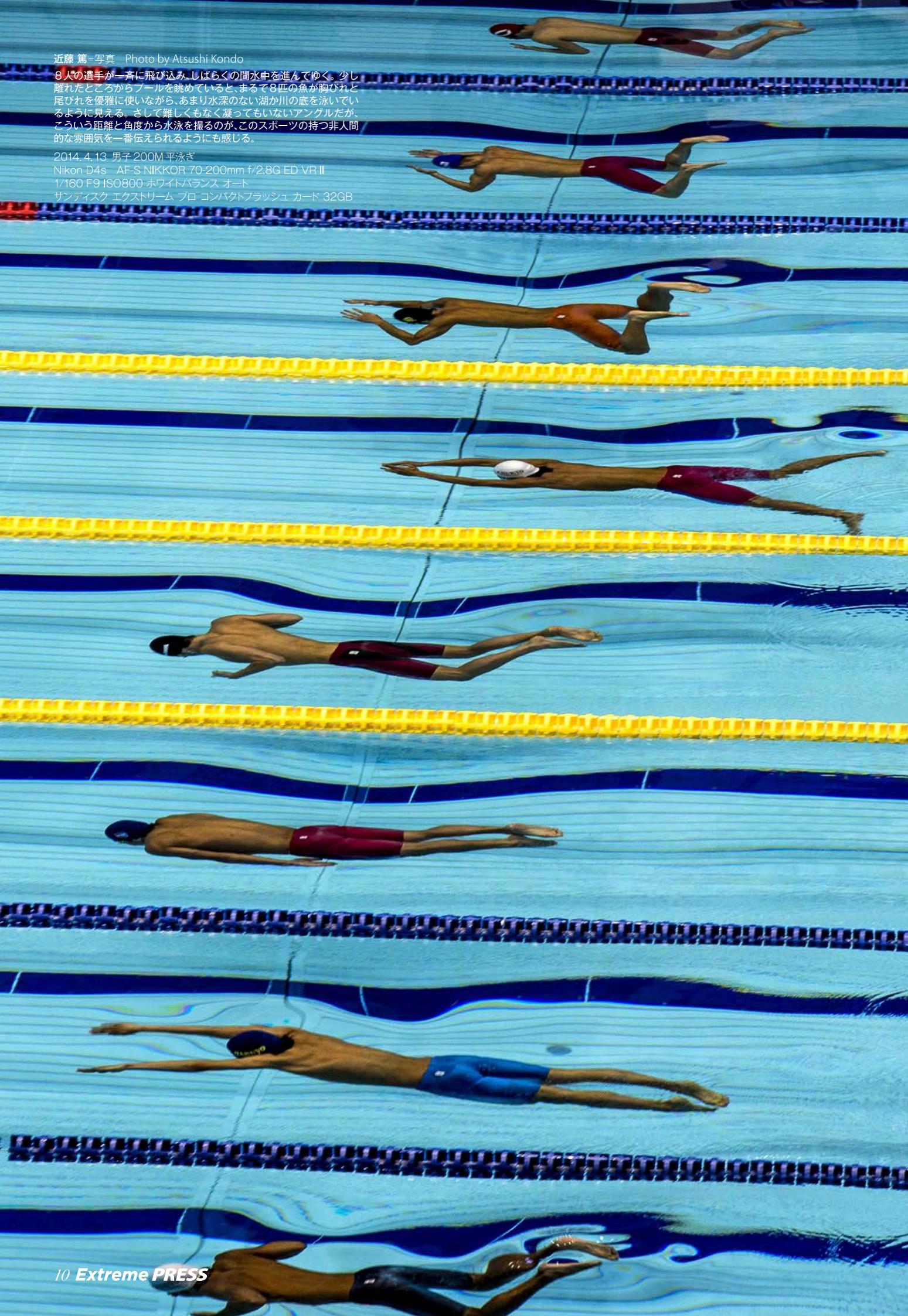
8人の選手が一斉に飛び込み、しばらくの間水中を進んでゆく。少し離れたところからプールを眺めていると、まるで8匹の魚が胸びれと尾びれを優雅に使いながら、あまり水深のない湖か川の底を泳いでいるように見える。さて難しくもなく凝ってもないアングルだが、こういう距離と角度から水泳を撮るのが、このスポーツの持つ非人間的な雰囲気を一番伝えられるようにも感じる。

2014.4.13 男子 200M 平泳ぎ

Nikon D4s AF-S NIKKOR 70-200mm f/2.8G ED VR II

1/160 F9 ISO800 ホワイトバランス オート

サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 32GB



近藤 篤=写真 Photo by Atsushi Kondo

それぞれのスポーツにそのスポーツ独特の体型がある。水泳選手は非常に肩幅が広く、足先に進むにしたがって身体の線が細くなる。洋服をおしゃれに着こなすにはじやっかん不向きだが、写真を撮るには最適の美しさを持つ肉体だ。どこからどう撮っても、美しい肉体は美しくしか写らない。

2014.4.11 男子 50M 平泳ぎ

Nikon D3s AF-S NIKKOR 400mm AF-S f/2.8G ED VR

1/1250 F2.8 ISO800 ホワイトバランス オート

サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 32GB



「リオでは、見せたい

萩野公介

[東洋大学/ロンドン五輪・男子400m個人メドレー銅メダリスト]

初出場だった2012年ロンドン五輪では、初日の400m個人メドレーで銅メダルを獲得して、日本チームメダル量産の口火を切った萩野公介。東洋大1年生になった昨年は、日本選手権で6種目に挑戦して史上初の5冠を獲得し、7月からの世界選手権ではリレーを含めて7種目に挑戦して2個のメダルを獲得。日本競泳界に新しい道を切り拓く、逞しき新星だ。

—今年も4月の日本選手権では6種目に出場。4冠獲得で、昨年優勝した100m背泳ぎでは第一人者の入江陵介選手に敗れましたが、彼を復活させたのも萩野選手の多種目挑戦による刺激だと思います。

萩野 それも自分たちのように多種目に挑戦する人たちが担っている役割のひとつかなと思いますね。それで専門種目で頑張っている人たちのタイムも伸びれば、日本全体の底上げになるかなという感じはしています。

—これまでの日本には個人メドレーをやりながら他の種目でも世界へ挑戦する選手はなかなかいなかったけど、多種目でメダルを獲る、アメリカのマイケル・フェルプス選手やライアン・ロクテ選手に憧れてですか？

萩野 世界の競泳界でスター選手と言われるのは、そういった多種目に挑戦している選手だというのは間違いないし。だからこそ、自分もそなりたいと思いましたね。かつては、ああいうのはすごい外国人選手だからできることで、日本人にはできないみたいな考えも、正直あったと思います。今、自分がこういう立場になってみて、日本にもやれる選手はいたはずなのに、なぜだろうと疑問に思いました。

—高校卒業時にアメリカ留学も視野に入っていたのは、そんな思いもあったからなのですか？

萩野 それはありましたね。向こうにはそういう選手もいるから、一緒に練習するのもいい

かなと思って。でも今指導してくれている平井伯昌先生は多種目への挑戦を変に思うことも無く、自分が挑戦したいようにやらせてくれているので非常にやりやすいですね。

—実際に昨年は日本選手権や世界選手権などでやってみて、短いスパンで何本も泳ぐ難しさは感じましたか？

萩野 難しいといえば難しいけど、思っていたほどではなかったというか……。気持ち的に少しづつ慣れてきて切り替えがうまくできるようになれば、レースに対して集中できるし体も動いてくるようになるから、ある程度の結果は出せると思いました。でもバルセロナの世界選手権は8日間あったから、そこで集中力を持続けて頑張るというのは非常に難しいなと感じました。体が疲れると気持の持久力もなくなるてしまうというのを勉強しましたね。だからこそ、やり甲斐があるんですけど（笑）

—最終日の400m個人メドレーは3種目の平泳ぎが終わるまで瀬戸大也選手とダントツのトップ争いをしていたのに、最後で疲れて5位。もう少し前半を抑えるという気持はなかったのですか？

萩野 それは全然なかったですね。僕が狙っていたのは4分4~5秒台だったし、自分ができるのはああいうレースなので展開には悔いはないです。以前は抑えて後半にという意識もあったけど、前半から積極的に行かなければ世界とは戦えないというのを、ロンドン五輪で学びましたから。

—その経験を今年はどう活かそうとしていますか。日本選手権前は苦手な平泳ぎにも取り組んでいたようですが。

—来年の世界選手権や、再来年のリオデジャネイロ五輪へ向けてはどうですか？

萩野 個人メドレーの絶対的な力をつけるというのが今年の目標だから、苦手種目を無くすというのもあるし、それを実践するいいチャンスの年だとも思っています。それにロクテ選手も考

4年間で成長した姿を

折山淑美=文／末石直義=写真

Text by Toshimi Oriyama / Photo by Naoyoshi Sueishi

高校生時代に初出場した2012年ロンドン五輪では、見事に男子400m個人メドレーで銅メダルを獲得。一躍日本水泳界の新星として脚光を浴びた萩野公介は、その後も順調に進化を続け、昨年の日本選手権、さらには世界選手権でも次々にメダルを奪取した。果たして、今、彼の視線の先には何が見えるのか——。



調子いいようだし、フェルプス選手も復帰してちょっと調整しただけ、100mバタフライで52秒13を出しているので。8月のパンパシフィック選手権で一緒に泳げるかもしれない、それが今から楽しみですね。

—来年の世界選手権や、再来年のリオデジャネイロ五輪へ向けてはどうですか？

萩野 来年の世界選手権では去年のような失敗をしないようにしたいけど、次の年の五輪も考えて種目選びを始めなければいけないですね。



五輪に出る種目を決めて世界選手権にも出なければならないと思っているので。ただ、五輪では初日に400m個人メドレーと400m自由形があるので両方は難しいけど、種目数を絞ってしまうとロンドンの時の自分と何も変わらなくなるので……。リオでは、4年間で成長した姿を見せたいと思いますから。

—その中でも絶対に外したくないのは400m個人メドレーですか？

萩野 それは僕の中では一番大事な種目です

萩野公介 ●はぎの こうすけ

1994年8月15日生まれ、栃木県出身。作新学院高校時代の2010年に日本選手権の男子400m個人メドレーで2位入り、パンパシフィック水泳選手権の同種目で日本新記録をマーク。2012年には日本選手権の同種目で日本代表となる。ロンドン五輪に出場し、日本人選手としては男子の同種目初めてとなる銅メダルを獲得した。昨年も日本選手権史上初の5冠を達成し、世界選手権でも銀メダルを獲得するなど、日本水泳界期待のホープとして注目を浴びている。



Impression

プロカメラマンが選ぶ
〈サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード〉

「何も考えずに、素の状態でシャッターを押し続ける」

小林 洋=写真／竹澤 哲=文 Photo by Yow Kobayashi / Text by Satoshi Takezawa

写真は素直に伝える

400M個人メドレー決勝に出場した瀬戸大也選手を800mmのレンズで狙おうと小林は思った。フィルム時代では考えられなかつたISO25600という高感度のおかげで、室内でありながら、8000分の1秒でシャッターが切れる。

瀬戸選手が進んでいく方向の水面は乱れていない。これは正面であるからこそ撮れると、ファンダーを覗く前から分かっていたことだ。

小林が意図したのはその静かな水面に瀬戸選手の右手が入る瞬間を捉えることだった。ピントを右手に合わせた。

ところが、2スクロール目の時だった。瀬戸選手の顔が前方を向いていることに気がついた。「クロールであったから顔が見えるとは考えていなかった。えっと驚いたけど、すぐにピントの位置をずらした」

瀬戸選手は何かを見ようとしたのだろうか。

額が正面を向いている。力んでいないストローク。水面を刺すような左手の表情。ストロークに誘われるよう水が腕にまとわりついている。

水中にあるもう片方の腕は見えないが、これ

から水面上に上がってくるため右肩が水面を押し上げている。その背後には、バタ足による激しい水しぶきが見える。スイマーの手と足の動

きによって推進力が得られる、あたりまえのことを見直す。写真は素直に伝えている。しかも、静と動が見事に一枚の写真の中に同居している。

素になる瞬間を記録する

「僕が撮りたいのは人間であって、スポーツであれ何あれ、ジャンルは関係ないんです」

スポーツ選手に限らず、アーティストやあるいは3歳児の写真も撮り、「人間のおもしろさを伝える」ことが小林のテーマとなっている。

こだわってきたのは、イベントや大会を記録として残していく中でも、本当に記録しなければい

×〈Nikon D4s〉

押し続ける

けないことは何なのかを見抜くことだという。その人間が、どういう立ち位置で、何をしようとしているのかを記録することだ。

「人間は誰でも素になる瞬間がある。その瞬間を見つけてあげるのが僕らの仕事です」

長年高校サッカーを撮り続けてきている小林は、ある時、すぐ後ろの観客席から声をかけられた。振り返ると、かつて小林が写真を撮ったことのある元選手だった。その青年は、容姿からするとすでに別の職業に就いているようだった。

青年は小林が撮った写真のことに触れ、「小林さん、あの時、僕のあんなところをよく見てってくれましたね」と言った。

JAPAN SWIM2014 第90回日本選手権水泳競技大会 競泳競技
男子400メートル個人メドレー決勝。世界水泳2013バルセロナで優勝した瀬戸大也。結果は2位だったがその個性的な泳ぎは未知の魅力を秘めている。

2014.4.13 男子400M個人メドレー
Nikon D4s AF-S NIKKOR 800mm f/5.6E
FL ED VR 1/8000 F5.6 ISO25600 ホワイトバランスオート
サンディスク エクストリーム プロ コンパクトフラッシュカード 128GB



サンディスク
エクストリーム プロ コンパクトフラッシュ カード 128GB

重要なのは信頼性

そんな小林が絶大な信頼を置いているのがサンディスク エクストリーム プロ CFカード。「写真を撮っていて、本当に記録されているのかと心配になるようだと没頭できない。このCFカードは世界シェアナンバーワンであるから、これまでたくさんの失敗例も経験してきたはずだ。そのデータこそを、私は信頼したい。これまで集積してきたものがあるからこそ信頼できる。安心は、お金では買えないものです」

小林は撮影に合わせて容量を選ぶ。午前と午後に分けて128GBのカードを2枚持つて行ったりする。フィルム時代は大量のボジを時系列に整理するだけで膨大な時間が必要だった。しかしこのカードになってからはその大変な作業から解放された。

「記録として後世に残していく上で、撮ることだけに集中できるのはありがたい」

小林は、記録はカメラマンの重要な使命であることをいつも感じている。



小林 洋 ●こばやしよう

1950年2月7日東京都新宿区生まれ。東京写真大学(現東京工芸大学)写真科卒業。講談社写真部助手、契約スタッフを経て、1985年スタジオO2設立。撮影対象はオールジャンル。1977年以来高校サッカーを取材。高校サッカ一年鑑(講談社)制作スタッフとして活動。素の人間を記録し続けていくことをテーマとしている。

SanDisk®

最大160MB/秒^{*1}の世界最速^{*2}

256GB大容量コンパクトフラッシュ、新登場

VPG65に対応し、シネマ品質の4K動画撮影に最適な

サンディスク最高峰のコンパクトフラッシュ、エクストリーム プロ シリーズ。



最大
160 MB/秒
の読み取り速度

サンディスク エクストリーム プロ
コンパクトフラッシュ® カード

256GB (UDMA7 対応)

UDMA7

UDMA7対応カメラとの組み合わせで、
高精細映像の録画や連続撮影をより快適に。

[VPG65]

65MB/秒の最低転送速度を保証する
ビデオパフォーマンスギャランティーVPG65に対応。
シネマ品質の4K動画の撮影や録画に最適。

[大容量]

256GBの大容量で、高速連写による
膨大なRAW+JPG画像も、
4K動画・フルHD動画も保存。

[耐久性]

衝撃、振動、気温、湿度など過酷なテストをクリアし、
極限の状況下でも正確に動作するよう設計。

[信頼性]

厳しいストレステストをクリアした無期限保証^{*3}付き。

超高速性能・大容量

Extreme Series エクストリーム シリーズ

サンディスクはプロカメラマンの85.5%*から『安心のブランド』と評価されました。*2012年8月当社調べ(複数回答あり)。詳細は当社Webにてご確認いただけます。<http://www.sandisk.co.jp/leader2012/>

サンディスクはフラッシュメモリーカード世界*・国内**シェアNo.1ブランドです。 サンディスク 検索

* 2012年Gartner調べ(Gartner Dataquest ID No. G00252212, 05/15/13) **2012年GfK Japan調べ(家電量販店版売実績集計 メモリーカード・数量シェア) ©SanDisk, SanDiskロゴ, Compact Flash, コンパクトフラッシュ, 及びSanDisk Extreme Proは、米国及びその他の国におけるSanDisk Corporationの商標または登録商標です。その他の商標も特定の目的のために使用されるものであり、各権利者によって商標登録されている可能性があります。 *1 最大書き込み速度の数字はサンディスク社内テストの結果に基づきます。読み取り速度はこれより遅くなります。ホスト機器によって読み取り/書き込みの速度は異なる場合があります。1.1メガバイト(MB)=100万バイ。1ギガバイト(GB)=10億バイト、1倍速=150KB/s。記載された容量の一部はフォーマット及びその他の機能に使用されるため、すべての容量をデータ保存のために使用することはできません。*2 256GBの商品に限ります。*3 保証内容に基づきます。

Extreme PRESS by AJPS

アスリートの躍動を記録するスポーツ・グラフィックス
[エクストリームプレス]

Vol.12 2014
SUMMER

発行所・一般社団法人日本スポーツプレス協会
発行人・水谷章人
編集・エクストリームプレス編集委員会
〒112-0013 東京都文京区音羽1-21-10-603
☎03-3946-9033 <http://www.ajps.jp>

【無料】